

救助隊発足50周年を 迎えて



横浜市消防局長 荒井 守

平成26年8月、横浜市消防局では、救助隊発足から50年の節目を迎えます。

救助隊誕生の夜明け前である昭和30年代は、高度経済成長の時代であり、昭和39年開催の東京オリンピックに向けたインフラの整備が一段と進んだ時代でした。一方、災害に目を向けると、消防がこれまで経験したことのない、化学工場災害や火薬運搬車の爆発、さらに昭和38年11月には、国鉄鶴見、生麦間で死者161名、負傷者120名という列車脱線多重事故が発生しました。

これらの災害を契機として、昭和39年8月20日、警防部に救急救助課が設置され、「消防特別救助隊」が全国に先駆け誕生しました。救助隊発足にあたって陸上自衛隊富士学校でレンジャー訓練を受けたことから、当局では、救助隊を「レンジャー」と呼んでいます。

近年では、平成16年10月に発生した新潟県中越地震やJR西日本福知山線脱線列車事故を契機に、特別高度救助隊の設置が規定されたことから、当局では、40名の隊員と8台の車両、高度救助資機材を装備した特別高度救助部隊（スーパーレンジャー、通称「SR」）を平成21年4月に発足させました。現在では、あらゆる災害に対応するため、NBC災害の専門部隊として機動特殊災害対応隊を加え、56名の隊員と13台の車両で特別高度救助部隊を編成しています。

高度経済成長時代の激変する都市構造により、多様化する災害への対応を図るべく全国に先駆けて1隊22名で発足した救助隊は、その時代に応じた救助資機材や救助技術を駆使し、救助事象に対応してきましたが、近年のインフラに目を向けると、トンネル、橋りょう、石油コンビナート施設等の老朽化が進むなど、災害の発生リスクが一段と高まるとともに、新たに開発された技術やシステム等により、都市構造の複雑化が一層進展しており、より困難性の高い救助事象が現出することが危惧されます。

そういったことを受け、これまで先人が築いてきた足跡と脈々と受け継がれてきた精神を引き継ぎ、SRを筆頭に19隊322名の救助隊員は、救助隊としての誇りを胸に、市民の安心・安全に向け、さらに前進してまいります。



昭和54年 救助技術指導会「障害突破」(写真中央)